

源氏物語

夕顔

紫式部

與謝野晶子訳



うき夜半よはの悪夢と共になつかしきゆめ

もあとなく消えにけるかな (晶子)

源氏が六条に恋人を持つていたころ、御所からそこへ通う途中で、だいぶ重い病気をし尼になつた大弐だいにの乳母めのとを訪ねようと
して、五条辺のその家へ来た。乗つたままで車を入れる大門が
しめてあつたので、従者に呼び出させた乳母の息子むすこの惟光これみつの来
るまで、源氏はりっぱでないその辺の町を車からながめていた。
惟光の家の隣に、新しい檜垣ひがきを外囲いにして、建物の前のほう
は上げ格子こうしを四、五間ずっと上げ渡した高窓式になつていて、
新しく白い簾すだれを掛け、そこからは若いきれいな感じのする額を
並べて、何人かの女が外をのぞいている家があつた。高い窓に

顔が当たつてゐるその人たちは非常に背の高いもののように思われてならない。どんな身分の者の集まつてゐる所だろう。風変わりな家だと源氏には思われた。今日は車も簡素なのにして目だたせない用意がしてあつて、前駆の者にも人払いの声を立てさせなかつたから、源氏は自分のだれであるかに町の人も気はつくまいという気楽な心持ちで、その家を少し深くのぞこうとした。門の戸も蔀風しとみふうになつていて上げられてある下から家の全部が見えるほどの簡単なものである。哀れに思ったが、ただ仮の世の相であるから宮も藁屋わらやも同じことという歌が思われて、われわれの住居すまいだつて一所いっしょだとも思えた。端隠しのような物に青々とした蔓草つるくさが勢いよくかかつていて、その白い花だけがその辺で見る何よりもうれしそうな顔で笑つていた。そこに白く咲いてゐるのは何の花かという歌を口ずさんでいると、中将

の源氏につけられた近衛このえの隨身ずいしんが車の前に膝ひざをかがめて言った。

「あの白い花を夕顔と申します。人間のような名でございました、こうした卑しい家の垣根かきねに咲くものでございます」

その言葉どおりで、貧しげな小家がちのこの通りのあちら、こちら、あるものは倒れそうになった家の軒などにもこの花が咲いていた。

「気の毒な運命の花だね。一枝折つてこい」

と源氏が言うと、葩風しとみふうの門のある中へはいつて隨身は花を折つた。ちよつとしやれた作りになっている横戸の口に、黄色の生絹すずしの袴はかまを長めにはいた愛らしい童女が出て来て隨身を招いて、白い扇を色のつくほど薰物たきもので燻くゆらしたのを渡した。

「これへ載せておあげなさいまし。手で提さげては不恰ぶかつこう好な花ですもの」

隨身は、夕顔の花をちようどこの時門をあけさせて出て来た
惟光の手から源氏へ渡してもらった。

「鍵かぎの置き所がわかりませんでして、たいへん失礼をいたしました。
よいも悪いも見分けられない人の住む界わいではござい
まして、見苦しい通りにお待たせいたしましたして」

と惟光は恐縮していた。車を引き入れさせて源氏の乳母めのとの家
へ下おりた。惟光の兄の阿闍梨あじやり、乳母の婿の三河守みかわのかみ、娘などが皆
このごろはここに来ていて、こんなふうに源氏自身で見舞いに
来てくれたことを非常にありがたがっていた。尼も起き上がっ
ていた。

「もう私は死んでもよいと見られる人間なんでございしますが、
少しこの世に未練を持っておりましたのはこうしてあなた様
にお目にかかるということがあの世ではできませんからでござい

ます。尼になりました功德くどくで病気が楽になりました、こうしてあなた様の御前へも出られたのですから、もうこれで阿弥陀様あみだのお迎えも快くお待ちすることができましょう」

などと言つて弱々しく泣いた。

「長い間恢復かいふくしないあなたの病気を心配しているうちに、こんなふうになつてしまわれたから残念です。長生きをして私の出世する時を見てください。そのあとで死ねば九品蓮台くほんれんたいの最上位にだつて生まれることができるでしょう。この世に少しでも飽き足りない心を残すのはよくないということだから」

源氏は涙ぐんで言っていた。欠点のある人でも、乳母というような関係でその人を愛している者には、それが非常にりっぱな完全なものに見えるのであるから、まして養君やしないきみがこの世のだけよりもすぐれた源氏の君であつては、自身までも普通の者で

ないような誇りを覚えている彼女であつたから、源氏からこんな言葉を聞いてはただうれし泣きをするばかりであつた。息子むすこや娘は母の態度を飽き足りない齒がゆいもののように思つて、尼になつていながらこの世への未練をお見せするようなものである、俗縁のあつた方に惜しんで泣いていただくのはともかくもだがというような意味を、肱ひじを突いたり、目くばせをしたりして兄弟どうしで示し合つていた。源氏は乳母を憐あわれんでいた。

「母や祖母を早く失なくした私のために、世話する役人などは多数にあつても、私の最も親しく思われた人はあなただつたのだ。大人おとなになつてからは少年時代のように、いつもいつしよにいることができず、思い立つ時にすぐたずに訪ねて来るようなことでもできないのですが、今でもまだあなたと長く逢あわなないでいると心細い気がするほどなんだから、生死の別れというものがなければ

ばよいと昔の人が言つたようなことを私も思う」

しみじみと話して、袖そでで涙を拭ふいている美しい源氏を見ては、この方の乳母でありえたわが母もよい前生ぜんしやうの縁を持った人に違ちがいないという気がして、さつきから批難がましくしていた兄弟たちも、しんみりとした同情を母へ持つようになつた。源氏が引き受けて、もつと祈祷きとうを頼むことなどを命じてから、帰ろうとする時に惟光これみつに蠟燭ろうそくを点ともさせて、さつき夕顔の花の載せられて来た扇を見た。よく使い込んであつて、よい薰物たきものの香のする扇に、きれいな字で歌が書かれてある。

心あてにそれかとぞ見る白露の光添へたる夕顔の花

散らし書きの字が上品に見えた。少し意外だつた源氏は、風

流遊戯をしかけた女性に好感を覚えた。惟光に、

「この隣の家にはだれが住んでいるのか、聞いたことがあるか」と言うと、惟光は主人の例の好色癖が出てきたと思つた。

「この五、六日母の家におりますが、病人の世話をしておりますので、隣のことはまだ聞いておりません」

惟光これみつが冷淡に答えると、源氏は、

「こんなことを聞いたのでおもしろく思わないんだね。でもこの扇が私の興味をひくのだ。この辺のことに詳しい人を呼んで聞いてごらん」

と言つた。はいつて行つて隣の番人と逢つて来た惟光は、

「地方庁すけの介の名だけをいただいている人の家でございました。主人は田舎いなかへ行つてゐるそうで、若い風流好きの細君がいて、女房勤めをしているその姉妹たちがよく出入りすると申します。

詳しいことは下人げにんで、よくわからないのでございましょう」

と報告した。ではその女房をしているという女たちなのであろうと源氏は解釈して、いい気になつて、物馴ものなれた戯れをしかけたものだと思い、下の品であろうが、自分を光源氏と見て詠よんだ歌をよこされたのに対して、何か言わねばならぬという気がした。というのは女性にはほだされやすい性格だからである。懐紙ふところがみに、別人のような字体で書いた。

顔
寄りてこそそれかとも見め黄昏たそがれにほのぼの見つる花の夕

花を折りに行つた隨身に持たせてやった。夕顔の花の家の人
は源氏を知らなかつたが、隣の家の主人筋らしい貴人はそれら

しく思われて贈った歌に、返事のないのにきまり悪さを感じていたところへ、わざわざ使いに返歌を持たせてよこされたので、またこれに対して何か言わねばならぬなどと皆で言い合つたであらうが、身分をわきまえないしかただと反感を持つていた隨身は、渡す物を渡したただけですぐに帰つて来た。

前駆の者が馬上で掲げて行く松明たいまつの明りがほのかにしか光らないで源氏の車は行つた。高窓はもう戸がおろしてあつた。その隙間すきまから螢ほたる以上にかすかな灯ひの光が見えた。

源氏の恋人の六条貴女きじよの邸やしきは大きかつた。広い美しい庭があつて、家の中は気高けだかく上手じょうずに住み馴ならしてあつた。まだまつたく源氏の物とも思わせない、打ち解けぬ貴女を扱あつかうのに心を奪うばはれて、もう源氏は夕顔の花を思い出す余裕を持つていなかつたのである。早朝の帰りが少しおくれて、日のさしそめたころに

出かける源氏の姿には、世間から大騒ぎされるだけの美は十分に備わっていた。

今朝も五条の蔀風の門の前を通った。以前からの通り路ではあるが、あのちよつとしたことに興味を持つてからは、行き来のたびにその家が源氏の目についた。幾日かして惟光が出て来た。

「病人がまだひどく衰弱しているものでございますから、どうしてもそのほうの手が離せませんで、失礼いたしました」

こんな挨拶をしたあとで、少し源氏の君の近くへ膝を進めて
惟光朝臣は言つた。

「お話がございましたあとで、隣のことによく通じております者呼び寄せまして、聞かせたのでございますが、よくは話さないでございます。この五月ごろからそつと来て同居してい

る人があるようですが、どなたなのか、家の者にもわからせないようにしていますと申すのです。時々私の家との間の垣根かきねから私はのぞいて見るのですが、いかにもあの家には若い女の人たちがいるらしい影が簾すだれから見えます。主人がいなければつけない裳もを言いわけほどにでも女たちがつけておりますから、主人である女が一人いるに違いございません。昨日きのう夕日がすつかり家の中へさし込んでいました時に、すわって手紙を書いている女の顔が非常にきれいでした。物思いがあるふうでございましたよ。女房の中には泣いている者も確かにありました」

源氏はほほえんでいたが、もつと詳しく知りたいと思うふうである。自重をなさらなければならぬ身分は身分でも、この若さと、この美の備わった方が、恋愛に興味をお持ちにならぬいでは、第三者が見ていても物足らないことである。恋愛をす

る資格がないように思われているわれわれでさえもずいぶん女の
ことでは好奇心が動くのであるからと惟光これみつは主人をながめて
いた。

「そんなことから隣の家の内の秘密がわからないものでもないと思
いまして、ちよつとした機会をとらえて隣の女へ手紙をやつ
てみました。するとすぐに書き馴なれた達者な字で返事がまいり
ました、相当によい若い女房もいるらしいのです」

「おまえは、なおどしどし恋の手紙を送つてやるのだね。それ
がよい。その人の正体が知れないではなんだか安心ができない」
と源氏が言った。家は下げの下げに属するものと品定めしなざだの人たち
に言われるはずの所でも、そんな所から意外な趣のある女を見
つけ出すことがあればうれしに違いないと源氏は思うのであ
る。

源氏は空蟬うつせみの極端な冷淡さをこの世の女の心とは思われな
と考えると、あの女が言うままになる女であつたなら、氣の毒な
過失をさせたということだけで、もう過去へ葬つてしまつたか
もしれないが、強い態度を取り続けられるために、負けたくな
いと反抗心が起こるのであるとこんなふう^にに思われて、その人
を忘れてゐる時は少ないのである。これまでは空蟬階級うつせみの女が
源氏の心を引くようなこともなかつたが、あの雨夜の品定めを
聞いて以来好奇心はあらゆるものに動いて行つた。何の疑いも
持たずに一夜の男を思つてゐるもう一人の女を憐まあわれないのでは
ないが、冷静にしている空蟬にそれが知れるのを、恥ずかしく
思つて、いよいよ望みのないことのわかる日まではと思つてそ
れきりにしてあるのであつたが、そこへ伊予介いよのすけが上京して来た。
そして真先まっさきに源氏の所へ伺候した。長い旅をして来たせいで、

色が黒くなりやつれた伊予の長官は見栄みえも何もなかった。しかし家柄もいいものであつたし、顔だちなどに老いてもなお整つたところがあつて、どこか上品なところのある地方官とは見えなかつた。任地の話などをしたので、湯の郡こほりの温泉話も聞きたい気はあつたが、何ゆえとなしにこの人を見るとときまりが悪くなつて、源氏の心に浮かんでくることは数々の罪の思い出であつた。まじめな生一本きいっほんの男と対むかつていて、やましい暗い心を抱くとはけしからぬことである。人妻に恋をして三角関係を作る男の愚かささまのかみを左馬頭の言つたのは真理であると思うと、源氏は自分に対して空蟬の冷淡なのは恨めしいが、この良人おつとのためには尊敬すべき態度であると思うようになった。

伊予介が娘を結婚させて、今度は細君を同伴して行くという噂うわさは、二つとも源氏が無関心で聞いていられないことだつた。

恋人が遠国へつれられて行くと聞いては、再会を気長に待つて
いられなくなつて、もう一度だけ逢あうことはできぬかと、小君こぎみ
を味方にして空蟬に接近する策を講じたが、そんな機会を作る
ということとは相手の女も同じ目的を持つている場合だつても困
難なのであるのに、空蟬のほうでは源氏と恋をすることの不似
合いを、思い過ぎるほどに思つていたのであるから、この上罪
を重ねようとはしないのであつて、とうてい源氏の思うように
はならないのである。空蟬はそれでも自分が全然源氏から忘れ
られるのも非常に悲しいことだと思つて、おりおりの手紙の返
事などに優しい心を見せていた。なんでもなく書く簡単な文字
の中に可憐かれんな心が混ひじつていたり、芸術的な文章を書いたりし
て源氏の心を惹ひくものがあつたから、冷淡な恨めしい人であつ
て、しかも忘れられない女になつていた。もう一人の女は他人

と結婚をしても思いどおりに動かしうる女だと思つていたから、いろいろな噂を聞いても源氏は何とも思わなかつた。秋になつた。このごろの源氏はある発展を遂げた初恋のその続きの苦悶くもんの中にいて、自然左大臣家へ通うことも途絶えがちになつて恨めしがられていた。六条の貴女きじよとの関係も、その恋を得る以前ほどの熱をまた持つことのできない悩みがあつた。自分の態度によつて女の名誉が傷つくことになつてはならないと思つて、夢中になるほどその人の恋しかつた心と今の心とは、多少懸隔へだたりのあるものだつた。六条の貴女はあまりにものを思い込む性質だつた。源氏よりは八歳上やっつの二十五であつたから、不似合いな相手と恋に墮おちて、すぐにまた愛されぬ物思いに沈む運命なのだろうかと、待ち明かしてしまふ夜などには煩悶はんもんすることが多かつた。

霧の濃くおりた朝、帰りをそそのかさされて、睡むねそうなふうで
歎息たんそくをしながら源氏が出て行くのを、貴女の女房の中将が格子こうし
を一間だけ上げて、女主人おんなあるじに見送らせるために几帳きちようを横へ引い
てしまった。それで貴女は頭を上げて外をながめていた。いろ
いろに咲いた植え込みの花に心が引かれるようで、立ち止まり
がちに源氏は歩いて行く。非常に美しい。廊のほうへ行くのに
中将が供をして行った。この時節にふさわしい淡紫うすむらさきの薄物の裳も
をきれいに結びつけた中将の腰つきが艶えんであった。源氏は振り
返って曲がり角かどの高欄たかねの所へしばらく中將を引き据すえた。なお
主従の礼をくずさない態度も額髪ひたいがみのかかりぎわのあざやかさも
すぐれて優美な中将だった。

「咲く花に移るてふ名はつつめども折らで過ぎうき今朝けさの朝

顔

どうすればいい」

こう言つて源氏は女の手を取つた。物馴れたふうで、すぐに、

朝霧の晴れ間も待たぬけしきにて花に心をとめぬとぞ見る

と言う。源氏の焦点をはずして主人の侍女としての挨拶をし

たのである。美しい童侍わらわぎむらいの恰好かつこうのよい姿をした子が、指貫さしぬきの袴はかま

を露ぬで濡らしながら、草花の中へはいつて行って朝顔の花を持つて来たりもするのである、この秋の庭は絵にしたいほどの趣があつた。源氏を遠くから知つてゐるほどの人でもその美を敬愛しない者はない、情趣を解しない山の男でも、休み場所には桜

の蔭かげを選ぶようなわけで、その身分身分によつて愛している娘を源氏の女房にさせたいと思つたり、相当な女であると思う妹を持つた兄が、ぜひ源氏の出入りする家の召使にさせたいとか皆思つた。まして何かの場合には優しい言葉を源氏からかけられる女房、この中将のような女はおろそかにこの幸福を思つていない。情人になろうなどとは思いも寄らぬことで、女主人の所へ毎日おいでになればどんなにうれしいであろうと思つていたのであつた。

それから、あの惟光これみつの受け持ちの五条の女の家を探る件、それについて惟光はいろいろな材料を得てきた。

「まだだれであるかは私にわからない人でございます。隠れていることの知れないようにとずいぶん苦心する様子です。閑暇ひまなものですから、南のほうの高い窓のある建物のほうへ行つて、

車の音がすると若い女房などは外をのぞくようですが、その主人らしい人も時にはそちらへ行つてゐることがございます。その人は、よくは見ませんが、いぶん美人らしゅうございます。この間先払いの声を立てさせて通る車がございましたが、それをのぞいて女の童わらわが後ろの建物のほうへ来て、『右近うこんさん、早くのぞいてごらんさい、中将さんが通りをいらつしやいます』と言いますと相当な女房が出て来まして、『まあ静かになさいよ』と手でおさえるようにしながら、『まあどうしてそれがわかつたの、私のがぞいて見ましよう』と言つて前の家のほうへ行くのですね、細い渡り板が通路なんですから、急いで行く人は着物の裾すそを引っかけて倒れたりして、橋から落ちそうになつて、『まあいやだ』などと大騒ぎで、もうのぞきに出る気もなくなりそうですね。車の人は直衣のうし姿で、隨身たちもおりました。だ

れだれも、だれだれもと数えている名は頭中将とうのちゆうじょうの隨身や少年侍の名でございました」

などと言つた。

「確かにその車の主が知りたいものだ」

もしかすればそれは頭中将が忘られないように話した常夏とこなつの歌の女ではないかと思つた源氏の、もしよく探りたいらしい顔色を見た惟光これみつは、

「われわれ仲間の恋と見せかけておきまして、実はその上に御主人のいらつしやることもこちらは承知しているのですが、女房相手の安価な恋の奴やつこになりすましております。向こうでは上手じょうずに隠せていると思ひまして私が訪ねて行つてる時などに、女の童わらわなどがうっかり言葉をすべらしたりいたしますと、いろいろに言い紛らしまして、自分たちだけだというふうを作ろうとい

たします」

と言つて笑つた。

「おまえの所へ尼さんを見舞いに行つた時に隣をのぞかせてくれ」

と源氏は言つていた。たとえ仮住まいであつてもあの五条の家にいる人なのだから、下の品の女であろうが、そうした中におもしろい女が発見できればと思うのである。源氏の機嫌きげんを取ろうと一所懸命の惟光であつたし、彼自身も好色者で他の恋愛にさえも興味を持つほうであつたから、いろいろと苦心をした末に源氏を隣の女の所へ通わせるようにした。

女のだれであるかをぜひ知ろうともしないとともに、源氏は自身の名もあらわさずに、思いきり質素なふうをして多くは車にも乗らずに通つた。深く愛しておらねばできぬことだと惟光

は解釈して、自身の乗る馬に源氏を乗せて、自身は徒歩で供をした。

「私から申し込みを受けたあすこの女はこの態ていを見たら驚くでしょう」

などところぼしてみせたりしたが、このほかには最初夕顔の花を折りに行った隨身と、それから源氏の召使であるともあまり顔を知られていない小侍だけを供にして行った。それから知れることになってはとの気づかいから、隣の家へ寄るようなこともしない。女のほうでも不思議でならない気がした。手紙の使いが来るとそつと人をつけてやったり、男の夜明けの帰りに道を窺うかがわせたりしても、先方は心得ていてそれらをはぐらかしてしまった。しかも源氏の心は十分に惹ひかれて、一時的な関係にとどめられる気はしなかった。これを不名誉だと思う自尊心に

悩みながらしばしば五条通いをした。恋愛問題ではまじめな人も過失をしがちなものであるが、この人だけはこれまで女のことで世間の批難を招くようなことをしなかつたのに、夕顔の花に傾倒してしまった心だけは別だつた。別れ行く間も昼の間もその人をかたわらに見がたい苦痛を強く感じた。源氏は自身で、氣違ひじみたことだ、それほどの価値がどこにある恋人かなどと反省もしてみるのである。驚くほど柔らかかでおおような性質で、深味のあるような人でもない。若々しい一方の女であるが、処女であつたわけでもない。貴婦人ではないようである。どこがそんなに自分を惹きつけるのであろうと不思議でならなかつた。わざわざ平生の源氏に用のない狩衣かりぎぬなどを着て変装した源氏は顔なども全然見せない。ずっと更ふけてから、人の寝静まつたあとで行つたり、夜のうちに帰つたりするのであるから、女のほ

うでは昔の三輪みわの神の話のような気がして気味悪く思われ
ない。やはり好色な隣の五位ごいが導いて来た人に違ちがいと惟光これみつ
を疑うっているが、その人はままったく気がつかぬふうで相変あひわら
ず女房にようぼうの所へ手紙を送おくつて来たり、訪たずねて来たりするので、ど
うしたことかと女のほうでも普通の恋の物思ものおもいとは違ちがつた煩悶はんもん
をしていた。源氏もこんなに真実を隠し続ければ、自分も女の
だれであるかを知りようがない、今の家が仮すまいの住居であること
は間違まちがいのないことらしいから、どこかへ移うつつて行いつてしまつ
た時に、自分は呆然ぼうぜんとするばかりであろう。行くえを失うつても
あきらめがすぐつくものならよいが、それは断然不可能である。
世間をはばかつて間あを空ける夜などは堪たえられない苦痛を覚え

るのだと源氏は思つて、世間へはだれとも知らせないで二条の院へ迎えよう、それを悪く言われても自分はそうなる前生の因縁だと思ふほかはない、自分ながらもこれほど女に心を惹かれ、た経験が過去にないことを思うと、どうしても約束事と解釈するのが至当である、こんなふうには源氏は思つて、

「あなたもその気におなりなさい。私は気楽な家へあなたをつれて行つて夫婦生活がしたい」こんなことを女に言い出した。

「でもまだあなたは私を普通には取り扱つていらつしやらない方なんですから不安で」

若々しく夕顔が言う。源氏は微笑された。

「そう、どちらかが狐きつねなんだらうね。でも欺だまされていらつしやればいいじゃない」

なつかしいふうには源氏が言うと、女はその気になつていく。

どんな欠点があるにしても、これほど純な女を愛せずにはいられないではないかと思つた時、源氏は初めからその疑いを持つていたが、とうのちゆうじょう頭中将の常夏の女はいよいよこの人らしいという考えが浮かんた。しかし隠しているのはわけのあることであらうからと思つて、しいて聞く気にはなれなかつた。感情を害した時などに突然そむいて行つてしまふような性格はなさそうである、自分が途絶えがちになつたりした時には、あるいはそんな態度に出るかもしれぬが、自分ながら少し今の情熱が緩和された時にかえつて女のよさがわかるのではないかと、それを望んでもできないのだから途絶えの起こつてくるわけではない、したがつて女の気持ちを不安に思う必要はないのだと知つていた。

八月の十五夜であつた。明るい月光が板屋根の隙間すきまだらけの家の中へさし込んで、狭い家の中の物が源氏の目に珍しく見え

た。もう夜明けに近い時刻なのであろう。近所の家々で貧しい男たちが目をさまして高声で話すのが聞こえた。

「ああ寒い。今年ことしこそもう商売のうまくいく自信が持てなくなつた。地方廻りもできそうでないんだから心細いものだ。北隣さん、まあお聞きなさい」

などと言っているのである。哀れなその日その日の仕事のために起き出して、そろそろ労働を始める音なども近い所でするのを女は恥ずかしがっていた。氣どつた女であれば死ぬほどきまりの悪さを感じる場所に違いない。でも夕顔はおおようにしていた。人の恨めしさも、自分の悲しさも、体面の保たれぬきまり悪さも、できるだけ思ったとは見せまいとするふうで、自分自身は貴族の子らしく、娘らしくて、ひどい近所の会話の内容もわからぬようであるのが、恥じ入られたりするよりも感じ

がよかつた。ごほごほと雷以上の恐いこわ音をさせる唐白からうすなども、すぐ寢床のそばで鳴るように聞こえた。源氏もやかましいとこれには思った。けれどもこの貴公子も何から起こる音とは知らないのである。大きなたまらぬ音響のする何かだと思つていた。そのほかにもまだ多くの騒がしい雑音が聞こえた。白い麻布を打つ砧きぬたのかすかな音もあちこちにした。空を行く雁かりの声もした。秋の悲哀がしみじみと感じられる。庭に近い室であつたから、横の引き戸を開けて二人で外をながめるのであつた。小さい庭にしゃれた姿の竹せんざいが立っていて、草の上の露はこんなところのも二条の院の前裁せんざいのせんざいに変わらずきらきらと光っている。虫もたくさん鳴っていた。壁の中で鳴くといわれて人間の居場所に最も近く鳴くものになつてゐる蟋蟀こおろぎでさえも源氏は遠くの声だけしか聞いていなかつたが、ここではどの虫も耳のそばへとまつ

て鳴くような風変わりな情趣だと源氏が思うのも、夕顔を深く愛する心が何事も悪くは思わせないのであろう。白い袷あわせに柔らかな淡紫うすむらさきを重ねたはなやかな姿ではない、ほつそりとした人で、どこかきわだつて非常によいところはないが繊細な感じのする美人で、ものを言う様子に弱々しい可憐かれんさが十分にあつた。才氣らしいものを少しこの人に添えたらと源氏は批評的に見ながらも、もつと深くこの人を知りたい気がして、

「さあ出かけましょう。この近くのある家へ行つて、気楽に明日あすまで話しましょう。こんなふうでいつも暗い間に別れていかなければならないのは苦しいから」

と言うと、

「どうしてそんなに急なことをお言い出しになりますの」
おおように夕顔は言っていた。変わらぬ恋を死後の世界にま

で続けようと源氏の誓うのを見ると何の疑念もはさまずに信じ
てよろこぶ様子などのうぶさは、一度結婚した経験のある女と
は思えないほど可憐であつた。源氏はもうだれの思わくもはば
かる気がなくなつて、右近うこんに隨身を呼ばせて、車を庭へ入れる
ことを命じた。夕顔の女房たちも、この通う男が女主人を深く
愛していることを知つていたから、だれともわからずにいなが
ら相当に信頼していた。

ずっと明け方近くなつてきた。この家に鶏とりの声は聞こえない
で、現世利益りやくの御岳教みたけきょうの信心なのか、老人らしい声で、起たつた
りすわつたりして、とても忙しく苦しそうにして祈る声が聞か
れた。源氏は身にしむように思つて、朝露と同じように短い命
を持つ人間が、この世に何の慾よくを持つて祈祷きとうなどをするのだろ
うと聞いているうちに、

「南無^{なむ}当^あ来^{らい}の導師^{だうし}」

と阿^あ弥^み陀^だ如^{にょ}来^{らい}を呼^よびか^けた。

「そら聞いてごらん。現世利益だけが目的じゃなかつた」とほめて、

優^う婆^ぼ塞^{そく}が行^いな^なふ道^{みち}をし^しる^べにて来^きん世^よも深^{ふか}き契^{せき}りた^がふな

とも言^いつた。玄^{げん}宗^{そう}と楊^{よう}貴^き妃^ひの七^{しち}月^{げつ}七^{しち}日^{にち}の長^{なが}生^{せい}殿^{でん}の誓^{ちか}いは実^{じつ}現^{げん}され^ない空^{くう}想^{そう}であ^あつた^が、五^ご十^{じゅう}六^{りく}億^{いっぴやく}七^{しち}千^{せん}万^{まん}年^{ねん}後^ごの弥^み勒^{らく}菩^ぼ薩^{さつ}出^{しゅつ}現^{げん}の世^よま^までも変^かわ^らぬ誓^{ちか}いを源^{げん}氏^しは^した^ので^ある。

よ 前^{さき}の世^よの契^{せき}り知^しら^るる身^みのう^うさ^さに^に行^いく末^{すえ}か^かけて頼^{たの}み^みが^がた^たさ

と女は言った。歌を詠む才なども豊富であろうとは思われな
い。月夜に出れば月に誘惑されて行つて帰らないことがあると
いうことを思つて出かけるのを躊躇する夕顔に、源氏はいろい
ろに言つて同行を勧めているうちに月もはいつてしまつて東の
空の白む秋のしのめが始まつてきた。

人目を引かぬ間にと思つて源氏は出かけるのを急いだ。女の
からだを源氏が軽々と抱いて車に乗せ右近が同乗したのであつ
た。五条に近い帝室の後院である某院へ着いた。呼び出した院
の預かり役の出て来るまで留めてある車から、忍ぶ草の生い茂つ
た門の廂ひさしが見上げられた。たくさんにある大木が暗さを作つて
いるのである。霧も深く降つていて空気の湿しめっぽいのに車の簾すだれ
を上げさせてあつたから源氏の袖そでもそのうちべつたりと濡ぬれて

しまった。

「私にははじめての経験だが妙に不安なものだ。

いにしへもかくやは人の惑ひけんわがまだしらぬしののめの道

前にこんなことがありましたか」

と聞かれて女は恥ずかしそうだった。

「山の端はの心も知らず行く月は上うはの空にて影や消えなん

心細うこございます、私は」

凄すこさに女がおびえてもいるように見えるのを、源氏はあの小

さい家におおぜい住んでいた人なのだから道理であると思つておかしかった。

門内へ車を入れさせて、西の対たいに仕度したくをさせている間、高欄に車の柄を引っかけて源氏らは庭にいた。右近は艶えんな情趣を味わいながら女主人の過去の恋愛時代のある場面なども思い出されるのであつた。預かり役がみずから出てする客人の扱いが丁寧きわまるものであることから、右近にはこの風流男の何者であるかがわかつた。物の形がほのぼの見えるところに家へはいつた。にわかな仕度ではあつたが体裁よく座敷がこしらえてあつた。

「だれというほどの人がお供しておらないなどは、どうもいやはや」

などといつて預かり役は始終出入りする源氏の下家司しもけいしでもあつ

たから、座敷の近くへ来て右近に、

「御家司をどなたかお呼び寄せしたものでございましょうか」
と取り次がせた。

「わざわざだれにもわからない場所にここを選んだのだから、おまえ以外の者にはすべて秘密にしておいてくれ」

と源氏は口留めをした。さつそくに調えられた粥かゆなどが出た。給仕も食器も間に合わせを忍ぶよりほかはない。こんな経験を持たぬ源氏は、一切を切り放して気にかけてぬこととして、恋人とはばかり語り合う愉楽に酔おうとした。

源氏は昼ごろに起きて格子を自身で上げた。非常に荒れていて、人影などは見えずにはるばると遠くまでが見渡される。向こうのほうの木立ちは気味悪く古い大木に皆なつていた。近い植え込みの草や灌木かんぼくなどには美しい姿もない。秋の荒野の景色けしき

になつてゐる。池も水草でうずめられた^{すこ}凄^{すこ}いものである。別れた棟^{むね}のほうに部屋^{へや}などを持って預かり役は住むらしいが、そこそこことはよほど離れてゐる。

「気味悪い家になつてゐる。でも鬼なんかだつて私だけはどうともしなからう」

と源氏は言つた。まだこの時までは顔を隠していたが、この態度を女が恨めしがつてゐるのを知つて、何たる錯誤だ、不都合なのは自分である、こんなに愛していながらと気がついた。

「夕露にひもとく花は玉銚^{たまぼこ}のたよりに見えし縁^{えに}こそありけれ

あなたの心あてにそれかと思つた時^{とき}の人の顔を近くに
見て幻滅が起こりませんか」

と言う源氏の君を後目しりめに女は見上げて、

光ありと見し夕顔のうは露は黄昏時たそがれどきのそら目なりけり

と言つた。冗談じょうだんまでも言う氣になつたのが源氏にはうれしかつた。打ち解けた瞬間から源氏の美はあたりに放散した。古くさく荒れた家との対照はまして魅惑的だつた。

「いつまでも眞実のことを打ちあけてくれないのが恨めしくつて、私もだれであるかを隠し通したのだが、負けた。もういいでしょう、名を言つてください、人間離れがあまりしすぎます」と源氏が言つても、

「家も何もない女ですもの」

と言つてそこまではまだ打ち解けぬ様子も美しく感ぜられた。

「しかたがない。私が悪いのだから」

と怨うらんでみたり、永久の恋の誓いをし合ったりして時を送つた。

惟光これみつが源氏の居所を突きとめてきて、用意してきた菓子などを座敷へ持たせてよこした。これまで白しらばくれていた態度を右近うこんに恨まれるのがつらくて、近い所へは顔を見せない。惟光は源氏が人騒がせに居所を不明にして、一日を犠牲にするまで熱心になりうる相手の女は、それに値する者であるらしいと想像をして、当然自己のものになしうるはずの人を主君にゆずった自分じつは広量なものだと嫉妬しつとに似た心で自嘲じちようもし、羨望せんぼうもしていた。静かな静かな夕方の空をながめていて、奥のほうは暗くて気味が悪いと夕顔が思うふうなので、縁の簾すだれを上げて夕映ゆうばえの雲をいつしよに見て、女も源氏とただ二人で暮らしえた一日に、

まだまったく落ち着かぬ恋の境地とはいえ、過去に知らない満
足が得られたらしく、少しずつ打ち解けた様子が可憐かれんであった。
じつと源氏のそばへ寄つて、この場所がこわくてならぬふうで
あるのがいかにも若々しい。格子こうしを早くおろして灯ひをつけさせ
てからも、

「私のほうにはもう何も秘密が残っていないのに、あなたはま
だそうでないのだからいけない」

などと源氏は恨みを言っていた。陛下はきつと今日も自分を
お召しになつたに違いないが、捜す人たちはどう見当をつけて
どこへ行っているだろう、などと想像をしながらも、これほど
までにこの女を溺愛できあいしている自分を源氏は不思議に思った。六
条の貴女きじよもどんなに煩悶はんもんをしていることだろう、恨まれるのは
苦しいが恨むのは道理であると、恋人のことはこんな時にもま

ず気にかかった。無邪氣に男を信じていつしよにいる女に愛を感じるとともに、あまりにまで高い自尊心にみずから煩わされている六条の貴女が思われて、少しその点を取り捨てたならと、眼前の人に比べて源氏は思うのであった。

十時過ぎに少し寝入った源氏は枕まくらの所に美しい女がすわっているのを見た。

「私がどんなにあなたを愛しているかしのれないのに、私を愛さないで、こんな平凡な人をつれていらつしつて愛撫あいぶなさるのはあまりにひどい。恨めしい方」

と言つて横にいる女に手をかけて起こそうとする。こんな光景を見た。苦しい襲われた気持ちになつて、すぐ起きると、その時に灯ひが消えた。不気味なので、太刀たちを引き抜いて枕もとに置いて、それから右近を起こした。右近も恐ろしくてならぬと

いうふうで近くへ出て来た。

「わたどの渡殿にいる宿直とのいの人を起こして、ろうそく蝋燭をつけて来るように言うがいい」

「どうしてそんな所へまで参れるものでございますか、くろ暗うて」
「子供らしいじゃないか」

笑つて源氏が手をたたくとそれが反響になった。限りない気味悪さである。しかもその音を聞きつけて来る者はだれもない。夕顔は非常にこわがつてふるえていて、どうすればいいだろうと思うふうである。汗をずつぷりとかいて、意識のありなしも疑わしい。

「非常に物恐れをなさいます御性質ですから、どんなお気持ち
がなさるのでございませうか」

と右近も言った。弱々しい人で今日の昼間もへ部屋やの中を見ま

わすことができずに空をばかりながめていたのであるからと思
うと、源氏はかわいそうでならなかつた。

「私が行つて人を起こそう。手をたたくと山彦やまびこがしてうるさく
てならない。しばらくの間ここへ寄つていてくれ」

と言つて、右近を寢床のほうへ引き寄せておいて、両側の妻
戸の口へ出て、戸を押しあけたのと同時に渡殿についていた灯
も消えた。風が少し吹いている。こんな夜に侍者は少なく、
しかもありたけの人は寝てしまつていた。院の預かり役の息子むすこ
で、平生源氏が手もとで使つていた若い男、それから侍童が一
人、例の隨身、それだけが宿直とのいをしていたのである。源氏が呼
ぶと返辞をして起きて来た。

「蠟燭ろうそくをつけて参れ。隨身に弓の絃打つるうちをして絶えず声を出し
て魔性に備えるように命じてくれ。こんな寂しい所で安心をし

て寝ていていいわけはない。先刻せんこく惟光これみつが来たと言っていたが、どうしたか」

「参っておりますが、御用事もないから、夜明けにお迎えに参ると申して帰りました。ございます」

こう源氏と問答をしたのは、御所の滝口に勤めている男であったから、専門家的に弓絃ゆづるを鳴らして、

「火危あぶなし、火危し」

と言いながら、父である預かり役の住居すまいのほうへ行つた。源氏はこの時刻の御所を思つた。殿上てんじょうの宿直役人が姓名を奏上する名対面はもう終わっているだろう、滝口の武士の宿直の奏上があるころであると、こんなことを思つたところをみると、まだそう深更でなかったに違いない。寢室へ帰つて、暗がりの中を手で探ると夕顔はもとのままの姿で寝ていて、右近がそのそ

ばでうつ伏せになつていた。

「どうしたのだ。氣違いじみたこわがりようだ。こんな荒れた家などというものは、狐きつねなどが人をおどしてこわがらせるのだよ。私がおればそんなものにおどかさればしないよ」

と言つて、源氏は右近を引き起こした。

「とても氣持ちが悪うございますので下を向いておりました。奥様はどんなお氣持ちでいらつしやいますことでしょう」

「そうだ、なぜこんなにはかりして」

と言つて、手で探ると夕顔は息もしていない。動かしてみてもなよなよとして氣を失つているふうであつたから、若々しい弱い人であつたから、何かの物怪もののけにこうされているのであろうと思うと、源氏は歎息たんそくされるばかりであつた。蠟燭ろうそくの明りが来た。右近には立つて行くだけの力がありそうもないので、閨ねやに

近い几帳きちようを引き寄せてから、

「もつとこちらへ持つて来い」

と源氏は言つた。主君の寢室の中へはいるというまつたくそんな不謹慎な行動をしたことがない滝口は座敷の上段になつた所へもよう来ない。

「もつと近くへ持つて来ないか。どんなことも場所によることだ」

灯ひを近くへ取つて見ると、この閨の枕の近くに源氏が夢で見たとおりの容貌ようぼうをした女が見えて、そしてすつと消えてしまつた。昔の小説などにはこんなことも書いてあるが、実際にあるとは思ふと源氏は恐ろしくてならないが、恋人はどうなつたかという不安が先に立つて、自身がどうされるだろうかという恐れはそれほどなくて横へ寝て、

「ちよいと」

と言つて不気味な眠りからさませようとするが、夕顔のからだは冷えはてていて、息はまったく絶えているのである。頼りにできる相談相手もない。坊様などはこんな時の力になるものであるがそんな人もむろんここにはいない。右近に対して強がつて何かと言つた源氏であつたが、若いこの人は、恋人の死んだのを見ると分別も何もなくなつて、じつと抱いて、

「あなた。生きてください。悲しい目を私に見せないで」

と言つていたが、恋人のからだはますます冷たくて、すでに人ではなく遺骸いがいであるという感じが強くなつていく。右近はもう恐怖心も消えて夕顔の死を知つて非常に泣く。紫宸殿ししんでんに出て来た鬼は貞信公ていしんこうを威嚇いかくしたが、その人の威に押されて逃げた例などを思い出して、源氏はしいて強くなろうとした。

「それでもこのまま死んでしまうことはないだろう。夜というものは声を大きく響かせるから、そんなに泣かないで」

と源氏は右近に注意しながらも、恋人との歓会がたちまちにこうなったことを思うと呆然ぼうぜんとなるばかりであった。滝口を呼んで、

「ここに、急に何かに襲われた人があつて、苦しんでいるから、すぐに惟光これみつあそん朝臣の泊まっている家に行つて、早く来るように言えとだれかに命じてくれ。兄の阿闍梨あじやりがそこに来ているのだつたら、それもいつしよに来るようにと惟光に言わせるのだ。母親の尼さんなどが聞いて気にかけるから、たいそうには言わせないように。あれは私の忍び歩きなどをやかましく言つて止める人だ」

こんなふう順序を立ててもものを言いながらも、胸は詰まる

ようで、恋人を死なせることの悲しさがたまらないものに思われるのといっしょに、あたりの不気味さがひしひしと感ぜられるのであつた。もう夜中過ぎになつてゐるらしい。風がさつきより強くなつてきて、それに鳴る松の枝の音は、それらの大木に深く囲まれた寂しく古い院であることを思わせ、一風変わった鳥がかれ声で鳴き出すのを、梟ふくろうとはこれであろうかと思われた。考えてみるとどこへも遠く離れて人声もしないこんな寂しい所へなぜ自分は泊まりに來たのであろうと、源氏は後悔の念もしきりに起こる。右近は夢中になつて夕顔のそばへ寄り、このままふる慄え死にをするのでないかと思われた。それがまた心配で、源氏是一所懸命に右近をつかまえていた。一人は死に、一人はこうした正体もないふうで、自身一人だけが普通の人間なのであると思つたと源氏はたまらない気がした。灯ひはほのかに瞬またたいた。

て、中央の室との仕切りの所に立てた屏風びょうぶの上とか、室の中の隅々すみずみとか、暗いところの見えるここへ、後ろからひしひしと足音をさせて何か寄つて来る気がしてならない、惟光が早く来てくれればよいとばかり源氏は思った。彼は泊まり歩く家を幾軒も持った男であつたから、使いはあちらこちらと尋ねまわつてゐるうちに夜がぼつぼつ明けてきた。この間の長さは千夜にもあたるように源氏には思われたのである。やつとはるかな所で鳴く鶏の声がしてきたのを聞いて、ほつとした源氏は、こんな危険な目にどうして自分はあるのだらう、自分の心ではあるが恋愛についてはもつたいたない、思うべからざる人を思つた報いに、こんな後あとにも前まへにもない例となるようなみじめな目にあうのであらう、隠してもあつた事實はすぐに噂うわさになるであらう、陛下おぼしめの思召しをはじめとして人が何と批評することだらう、世

間の嘲笑ちやうしやうが自分の上に集まることであろう、とうとうついにこ

んなことで自分は名誉を傷つけるのだなと源氏は思っていた。

やつと惟光これみつが出て来た。夜中でも暁でも源氏の意のままに従つ

て歩いた男が、今夜に限つてそばにおらず、呼びにやつてもす
ぐの間に合わず、時間のおくれたことを源氏は憎みながらも寝
室へ呼んだ。孤独の悲しみを救う手は惟光にだけあることを源
氏は知っている。惟光をそばへ呼んだが、自分が今言わねばな
らぬことがあまりにも悲しいものであることを思うと、急には
言葉が出ない。右近は隣家の惟光が来た気配けはいに、亡なき夫人と源
氏との交渉の最初の時から今日までが連続的に思い出されて泣
いていた。源氏も今までは自身一人が強い人になって右近を抱
きかかえていたのであつたが、惟光の来たのにほつとすると同
時に、はじめて心の底から大きい悲しみが湧わき上がってきた。

非常に泣いたのちに源氏は躊躇ちゆうちゆうしながら言い出した。

「奇怪なことが起こったのだ。驚くという言葉では現わせないような驚きをさせられた。人のからだにこんな急変があつたりする時には、僧家へ物を贈つて読経じきようをしてもらうものだそうだから、それをさせよう、願を立てさせようと思つて阿闍梨あじやりも来てくれと言つてやつたのだが、どうした」

「昨日叡山きんのうえいざんへ帰りましたのでございます。まあ何ということでもございましょう、奇怪なことでございます。前から少しはおからだが悪かつたのでございますか」

「そんなこともなかつた」

と言つて泣く源氏の様子に、惟光も感動させられて、この人までが声を立てて泣き出した。老人はめんどうなものときされて
いるが、こんな場合には、年を取つていて世の中のいろいろな

経験を持つている人が頼もしいのである。源氏も右近も惟光も皆若かった。どう処置をしていいのか手が出ないのであつたが、やつと惟光が、

「この院の留守役などに真相を知らせることはよくございません。当人だけは信用ができませんでした、秘密の洩れやすい家族を持つていましようから。ともかくもここを出ていらつしやいませ」

と言つた。

「でもここ以上に人の少ない場所はほかにないじゃないか」

「それはそうでございます。あの五条の家は女房などが悲しがつて大騒ぎをするでしょう、多い小家の近所隣へそんな声が聞こえますとたちまち世間へ知れてしまいます、山寺と申すものはこうした死人などを取り扱ない馴れておりましようから、人目を

紛らすのには都合がよいように思われます」

考えるふうだった惟光は、

「昔知っております女房が尼になつて住んでいる家が東山にございますから、そこへお移しいたしましょう。私の父の乳母めのとをしておりました、今は老人としよりになつてゐる者の家でございます。東山ですから人がたくさん行く所のようにではございますが、そこだけは閑静です」

と言つて、夜と朝の入り替わる時刻の明暗の紛れに車を縁側へ寄せさせた。源氏自身が遺骸いがいを車へ載せることは無理らしかつたから、莫蔭ござに巻いて惟光これみつが車へ載せた。小柄な人の死骸からは悪感あくかんは受けられないできわめて美しいものに思われた。残酷ざんこくに思われるような扱い方を遠慮して、確かにも巻かなんだから、莫蔭の横から髪が少しこぼれていた。それを見た源氏は目がくら

むような悲しみを覚えて煙になる最後までも自分がついていた
いという気になったのであるが、

「あなた様はさつそく二条の院へお帰りなさいませ。世間の者
が起き出しませんうちに」

と惟光は言つて、遺骸には右近を添えて乗せた。自身の馬を
源氏に提供して、自身は徒歩で、袴はかまのくくりを上げたりして出
かけたのであった。ずいぶん迷惑な役のようにも思われたが、
悲しんでいる源氏を見ては、自分のことなどはどうでもよいと
いう気に惟光はなつたのである。

源氏は無我夢中で二条の院へ着いた。女房たちが、
「どちらからのお帰りなんでしょう。御気分がお悪いようです
よ」

などと言っているのを知っていたが、そのまま寢室へはいつ

て、そして胸をおさえて考えてみると自身が今経験していることは非常な悲しいことであるということがわかった。なぜ自分のはあの車に乗って行かなかつたのだろう、もし蘇生そせいすることがあつたらあの人はどう思うだろう、見捨てて行ってしまったと恨めしく思わないだろうか、こんなことを思うと胸がせき上がつてくるようで、頭も痛く、からだには発熱も感ぜられて苦しい。こうして自分も死んでしまうのであらうと思われるのである。八時ごろになつても源氏が起きぬので、女房たちは心配をしだして、朝の食事を寢室の主人へ勧めてみたが無駄むだだった。源氏は苦しくて、そして生命いのちの危険が迫つてくるような心細さを覚えていると、宮中のお使いが来た。帝みかどは昨日きのうもお召しになつた源氏を御覧になれなかつたことで御心配をあそばされるのであつた。左大臣家の子息たちも訪問して来たがそのうちの頭中とうのちゆうじょう将

にだけ、

「お立ちになつたままでちよつとこちらへ」

と言わせて、源氏は招いた友と御簾みすを隔てて対した。

「私の乳母めのとの、この五月ごろから大病をしていました者が、尼になつたりなどしたものですから、その効験ききめでか一時快よくなつていましたが、またこのごろ悪くなりまして、生前にもう一度だけ訪問をしてくれなどと言つてきているので、小さい時から世話になつた者に、最後に恨めしく思わせるのは残酷だと思つて、訪問しましたところがその家の召使の男が前から病氣をしていて、私のいるうちに亡なくなつたのです。恐縮して私に隠して夜になつてからそつと遺骸を外へ運び出したということを私は気がついたのです。御所では神事に関する御用の多い時期ですから、そうした穢けがれに触れた者は御遠慮すべきであると思つ

て謹慎をしているのです。それに今朝方けさがたからなんだか風邪かぜにかかったのですか、頭痛がして苦しいものですからこんなふうで失礼します」

などと源氏は言うのであつた。中将は、

「ではそのように奏上しておきましょう。昨夜も音楽のありました時に、御自身でお指図さしずをなさいましてあちこちとあなたをお捜させになつたのですが、おいでにならなかつたので、御機嫌ごきげんがよろしくありませんでした」

と言つて、帰ろうとしたがまた帰つて来て、

「ねえ、どんな穢けがれにおあいになつたのですか。さつきから伺つたのはどうもほんとうとは思われぬ」

と、頭中将から言われた源氏ははつとした。

「今お話したようにこまかにではなく、ただ思いがけぬ穢れ

にあいましたと申し上げてください。こんなので今日は失礼します」

素知らず顔には言っていて、心にはまた愛人の死が浮かんできて、源氏は気分も非常に悪くなった。だれの顔も見るのが物憂ものうかつた。お使いの蔵人くらうどの弁べんを呼んで、またこまごまと頭中将に語ったような行触ゆきぶれの事情を帝へ取り次いでもらった。左大臣家のほうへもそんなことで行かれぬという手紙が行ったのである。

日が暮れてから惟光これみつが来た。行触ゆきぶれの件を発表したので、二条の院への来訪者は皆庭から取り次ぎをもつて用事を申し入れて帰って行くので、めんどうな人はだれも源氏の居間にいなかった。惟光を見て源氏は、

「どうだった、だめだったか」

と言うと同時に袖を顔へ当てて泣いた。惟光も泣く泣く言う、
「もう確かにお亡れかくになつたのでございます。いつまでお置き
してもよくないこととございますから、それにちようど明日は
葬式によい日でしたから、式のことなどを私の尊敬する老僧が
ありまして、それとよく相談をして頼んでまいりました」
「いつしよに行つた女は」

「それがまたあまりに悲しがりまして、生きていられないとい
うふうなので、今朝けさは溪たにへ飛び込むのでないかと心配されまし
た。五条の家へ使いを出すというのですが、よく落ち着いてか
らにしなければいけないと申して、とにかく止めてまいりまし
た」

惟光の報告を聞いているうちに、源氏は前よりもいつそう悲
しくなつた。

「私も病気になつたようで、死ぬのじゃないかと思う」と言つた。

「そんなふうにもまでお悲しみになるのでございますか、よろしくございません。皆運命でございます。どうかして秘密のうちに処置をしたいと思ひまして、私も自身でどんなこともしているのでございますよ」

「そうだ、運命に違ひない。私もそう思うが軽率けいそつな恋愛漁あさりから、人を死なせてしまつたという責任を感じるのだ。君の妹の少将みょうしょうの命婦みよぼうなどにも言うなよ。尼君なんかはまたいつもああいつたふうのことをよくないよくないと小言こごとに言うほうだから、聞かれては恥はづかずかしくてならない」

「山の坊さんたちにもまるで話を變えてしてございます」

と惟光が言うので源氏は安心したようである。主従がひそひ

そ話をしているのを見た女房などは、

「どうも不思議ですね、行触ゆきぶれだとお言いになつて参内もなさらないし、また何か悲しいことがあるようにあんなふうにして話していらつしやる」

腑ふに落ちぬらしく言つていた。

「葬儀はあまり簡単な見苦しいものにしないほうがよい」

と源氏が惟光これみつに言つた。

「それでもごさいません。これは大層たいそうにいたしてよいことではごさいません」

と否定してから、惟光が立つて行こうとするのを見ると、急にまた源氏は悲しくなつた。

「よくないことだとおまえは思うだろうが、私はもう一度遺骸いがいを見たいのだ。それをしないではいつまでも憂鬱ゆううつが続くように

思われるから、馬でも行こうと思うが」

主人の望みを、とんでもない軽率なことであると思ひながらも惟光は止めることができなかつた。

「そんなに思召すおぼしめのならしかたがございませぬ。では早くいらつしやいまして、夜の更ふけぬうちにお帰りなさいませ」

と惟光は言つた。五条通いの変装のために作らせた狩衣かりぎぬに着更きえなどして源氏は出かけたのである。病苦が朝よりも加わつたこともわかつていて源氏は、軽はずみにそうした所へ出かけて、そこでまたどんな危険が命をおびやかすかもしれない、やめたほうがいいのではないかとも思つたが、やはり死んだ夕顔に引かれる心が強くて、この世での顔を遺骸で見てもおかなければ今後の世界でそれは見られないのであるという思ひが心細さをおさえて、例の惟光と隨身を従えて出た。非常に路みちのはかがゆか

ぬ気がした。十七日の月が出てきて、加茂川の河原を通るころ、前駆の者の持つ松明たいまつの淡い明りに鳥辺野とりべののほうが見えるという。こんな不気味な景色けしきにも源氏の恐怖心はもう麻痺まひしてしまつていた。ただ悲しみに胸が搔かき乱されたふうで目的地に着いた。凄すこい気のする所である。そんな所に住居すまいの板屋があつて、横に御堂みどうが続いているのである。仏前の燈明の影がほのかに戸からすいて見えた。部屋へやの中には一人の女の泣き声がして、その室の外と思われる所では、僧の二、三人が話しながら声を多く立てぬ念仏をしていた。近くにある東山の寺々の初夜しんぎょうの勤行も終わつたところで静かだつた。清水きよみづの方角にだけ灯ひがたくさんに見えて多くの参詣人さんけいの気配けはいも聞かれるのである。主人の尼むすこの息子の僧が尊い声で経を読むのが聞こえてきた時に、源氏はからだじゅうの涙がことごとく流れて出る気もした。中へはいつて見

ると、灯をあちら向きに置いて、遺骸との間に立てた屏風のこち
らに右近は横になつていた。どんなに侘しい気のことだろ
うと源氏は同情して見た。遺骸はまだ恐ろしいという気のしな
い物であつた。美しい顔をしていて、まだ生きていた時の可憐
さと少しも変わつていなかった。

「私にもう一度、せめて声だけでも聞かせてください。どんな
前生の縁だつたかわずかな間の関係であつたが、私はあなたに
傾倒した。それなのに私をこの世に捨てて置いて、こんな悲し
い目をあなたは見せる」

もう泣き声も惜しまずはばかりぬ源氏だつた。僧たちもだれ
とはわからぬながら、死者に断ちがたい愛着を持つらしい男の
出現を見て、皆涙をこぼした。源氏は右近に、
「あなたは二条の院へ来なければならぬ」

と言つたのであるが、

「長い間、それは小さい時から片時もお離れしませんでお世話になりました御主人ににわかにお別れいたしましたして、私は生きて帰ろうと思う所がございません。奥様がどうおなりになつたかということ、どうほかの人に話ができましたよう。奥様をお亡くなしましたほかに、私はまた皆にどう言われるかということも悲しゅうございます」

こう言つて右近は泣きやまない。

「私も奥様の煙といつしよにあの世へ参りとうございます」

「もつともだがしかし、人世とはこんなものだ。別れというものに悲しくないものはないのだ。どんなことがあつても寿命のある間には死ねないのだよ。気を静めて私を信頼してくれ」

と言う源氏が、また、

「しかしそういう私も、この悲しみでどうなってしまうかわからない」

と言うのであるから心細い。

「もう明け方に近いころだと思われます。早くお帰りにならないければいけません」

惟光これみつがこう促すので、源氏は顧みばかりがされて、胸も悲しみにふさがらせたまま帰途についた。露の多い路みちに厚い朝霧が立っていて、このままこの世でない国へ行くような寂しさが味わわれた。某院の閨ねやにいたままのふうで夕顔が寝ていたこと、その夜上に掛けて寝た源氏自身の紅の単衣ひとえにまだ巻かれていたこと、などを思つて、全体あの人と自分はどんな前生の因縁があつたのであろうと、こんなことを途々みちみち源氏は思つた。馬をかばかしく御して行けるふうでもなかつたから、惟光が横に添つ

て行つた。加茂川堤に来てとうとう源氏は落馬したのである。失心したふうで、

「家の中でもないこんな所で自分は死ぬ運命なんだろう。二条の院まではどうてい行けない気がする」

と言つた。惟光の頭も混乱状態にならざるをえない。自分が確しかとした人間だつたら、あんなことを源氏がお言いになつても、軽率にこんな案内はしなかつたはずだと思つたと悲しかった。川の水で手を洗つて清水きよみずの観音を拝みながらも、どんな処置をとるべきだろうと煩悶はんもんした。源氏もしいて自身を励まして、心の中で御仏みほとけを念じ、そして惟光たちの助けも借りて二条の院へ行き着いた。

毎夜続いて不規則な時間の出入りを女房たちが、

「見苦しいことですね、近ごろは平生よりもよく微行おしのびをなさる

中でも昨日きのうはたいへんお加減が悪いふうだったでしょう。そんなでおありになつてまたお出かけになつたりなさるのですから、困つたことすね」

こんなふうたんそくに歎息をしていた。

源氏自身が予言をしたとおりに、それきり床について煩つたのである。重い容体が二、三日続いたあとみかどはまた甚はなはだしい衰弱が見えた。源氏の病気を聞こし召した帝も非常に御心痛あそばされてあちらでもこちらでも間断なく祈きと禱が行なわれた。特別な神の祭り、祓はらい、修しゆほう法などである。何にもすぐれた源氏のような人はあるいは短命で終わるのではないかといつて、一天下の人がこの病気に関心を持つようにさえなつた。

病床にいながら源氏は右近を二条の院へ伴わせて、部屋へやなども近い所へ与えて、手もとで使う女房の一人にした。惟光これみつは源

氏の病の重いことに顛倒てんとうするほどの心配をしながら、じつとその気持ちをおさえて、馴染なじみのない女房たちの中へはいった右近のたよりなさそうなのに同情してよく世話をしてやった。源氏の病の少し楽に感ぜられる時などには、右近を呼び出して居間の用などをさせていたから、右近はそのうち二条の院の生活に馴なれてきた。濃い色の喪服を着た右近は、容貌ようぼうなどはよくもないが、見苦しくも思われぬ若い女房の一人と見られた。

「運命があの人に授けた短い夫婦の縁から、その片割れの私ももう長くは生きていないのだろう。長い間たよりにしてきた主人に別れたおまえが、さぞ心細いだろうと思うと、せめて私に命があれば、あの人への代わりの世話をしたいと思つたこともあったが、私もあの人のおとを追うらしいので、おまえには気の毒だね」

と、ほかの者へは聞かせぬ声で言つて、弱々しく泣く源氏を見る右近は、女主人に別れた悲しみは別として、源氏にもしまたそんなことがあれば悲しいことだろうと思つた。二条の院の男女はだれも静かな心を失つて主人の病を悲しんでいるのである。御所のお使いは雨の脚あしよりもしげく参入した。帝の御心痛が非常なものであることを聞く源氏は、もつたいたなくて、そのことによつて病から脱しようともみずから励むようになつた。左大臣も徹底的に世話をした。大臣自身が二条の院を見舞わない日もないのである。そしていろいろな医療や祈禱きとうをしたせいであるか、二十日ほど重態だつたあとに余病も起こらないで、源氏の病氣は次第に回復していくように見えた。行触ゆきふれの遠慮の正規の日数もこの日で終わる夜であつたから、源氏は逢あいたく思召おぼしめす帝みかどの御心中を察して、御所の宿直所とのいどころにまで出かけた。退出の

時は左大臣が自身の車へ乗せて邸やしきへ伴った。病後の人の謹慎のしかたなども大臣がきびしく監督したのである。この世界でない所へ蘇そせい生した人間のようにな分源氏は思った。

九月の二十日ごろに源氏はまったく回復して、瘦やせるには瘦せたがかえって艶えんな趣の添った源氏は、今も思いをよくして、またよく泣いた。その様子に不審を抱く人もあつて、物怪もののけが憑ついているのであろうとも言つていた。源氏は右近を呼び出して、ひまな静かな日の夕方に話をして、

「今でも私にはわからぬ。なぜだれの娘であるということをとどこまでも私に隠したのだらう。たとえどんな身分でも、私があればほどの熱情で思つていたのだから、打ち明けてくれていいわけだと思つて恨めしかった」

とも言つた。

「そんなにどこまでも隠そうなどとあそばすわけはございません。そうしたお話をなさいます機会がなかったのじゃございませんか。最初があんなふうでございましたから、現実の關係のようには思われないうちにお言いになつて、それでもまじめな方ならいつまでもこのふうで進んで行くものでもないから、自分は一時的な對象にされているにすぎないのだとお言いになつては寂しがつていらつしやいました」

右近がこう言う。

「つまらない隠し合いをしたものだ。私の本心ではそんなにまで隠そうとは思つていなかつた。ああいつた關係は私に経験のないことだつたから、ばかに世間がこわかつたのだ。御所の御注意もあるし、そのほかいろんな所に遠慮があつてね。ちよつとした恋をしても、それを大問題のように扱われるうるさい私

が、あの夕顔の花の白かった日の夕方から、むやみに私の心はあの人へ惹かれていくようになった、無理な関係を作るようになったのもしばらくしかかない二人の縁だったからだと思われる。しかしまた恨めしくも思うよ。こんなに短い縁よりないのなら、あれほどにも私の心を惹いてくれないければよかつたとね。まあ今でもよいから詳しく話してくれ、何も隠す必要はなからう。七日七日に仏像を描かせて寺へ納めても、名を知らないではね。それを表に出さないでも、せめて心の中でだれの菩提のためにと思いたいじゃないか」

と源氏が言った。

「お隠しなど決してしようとは思っておりません。ただ御自分のお口からお言いにならなかつたことを、お亡れになつてからおしやべりするのは濟まないような気がしただけでございます。

御両親はずつと前にお亡なくなりになつたのでございます。殿様は三位中将さんみでいらつしやいました。非常にかわいがつていらつしやいまして、それにつけても御自身の不遇をもどかしく思召おぼしめしたでしようが、その上寿命にも恵まれていらつしやいませんで、お若くてお亡なくなりになりましたあとで、ちよつとしたことが初めて頭とうのちゆうじよう中将がまだ少将でいらつしたところに通つておいでになるようになったのでございます。三年間ほどは御愛情があるふうで御関係が続いていましたが、昨年さねの秋ごろに、あの方の奥様のお父様の右大臣の所からおどすようなことを言つてまいりましたのを、気の弱い方でございましたから、むやみに恐ろしがつておしまいになりました、西の右京のほうに奥様の乳母めのとが住んでおりました家へ隠れて行つていらつしやいましたが、その家もかなりひどい家でございますからお困りになつ

て、郊外へ移ろうとお思ひになりましたが、今年の方角が悪いので、方角避けよにあの五条の小さい家へ行つておいでになりましたことから、あなた様がおいでになるようなことになりました。あの家があの家でございますから侘わびしがつておいでになつたようでございます。普通の人とはまるで違うほど内気で、物思ひをしていると人から見られるだけでも恥ずかしくてならぬいようにお思ひになりました、どんな苦しいことも寂しいことも心に納めていらしたようでございます」

右近のこの話で源氏は自身の想像が当たつたことで満足ができたとともに、その優しい人がますます恋しく思われた。

「小さい子を一人行方不明ゆくえにしたと言つて中将が憂鬱ゆううつになつていたが、そんな小さい人があつたのか」

と問うてみた。

「さようでございます。一昨年の春お生まれになりました。お嬢様で、とてもおかわいらしい方でございます」

「で、その子はどこにいるの、人には私が引き取ったと知らせないようにして私にその子をくれないか。形見も何もなくて寂しくばかり思われるのだから、それが実現できたらいいね」

源氏はこう言つて、また、

「頭中将にもいずれば話をするが、あの人をああした所で死なせてしまったのが私だから、当分は恨みを言われるのがつらい。私の従兄いとこの中将の子である点からいっても、私の恋人だった人の子である点からいっても、私の養女にして育てていいわけだから、その西の京の乳母にも何かほかのことにして、お嬢さんを私の所へつれて来てくれないか」

と言つた。

「そうになりましたらどんなに結構なことでごさいます。あの西の京でお育ちになつてはあまりにお氣の毒でごさいます。私も若い者ばかりでしたから、行き届いたお世話ができないということであつちへお預けになつたのでごさいます」

と右近は言つていた。静かな夕方の空の色も身にしむ九月だつた。庭の植え込みの草などがうら枯れて、もう虫の声もかすかにしかしなかつた。そしてもう少しずつ紅葉もみじの色づいた絵のよな景色けしきを右近はながめながら、思いもよらぬ貴族の家の女房になつてゐることを感じた。五条の夕顔の花の咲きかかつた家は思い出すだけでも恥ずかしいのである。竹の中で家鳩いえばとという鳥が調子はずれに鳴くのを聞いて源氏は、あの某院かれんでこの鳥の鳴いた時に夕顔のこわがった顔が今も可憐かれんに思い出されてならない。

「年は幾つだったの、なんだか普通の若い人よりもずっと若いようなふうに見えたのも短命の人だったからだね」

「たしか十九におなりになったのでございましょう。私は奥様のもう一人のほうの乳母の忘れ形見でございましたので、三位さんみ様がかわいがってくださいます、お嬢様といっしょに育ててくださいましたものでございます。そんなことを思いますと、あの方のお亡なくなりになりましたあとで、平気でよくも生きているものだど恥ずかしくなるのでございます。弱々しいあの方をただ一人のたよりになる御主人と思つて右近は参りました」

「弱々しい女が私はいちばん好きだ。自分が賢くないせいか、あまり聡明そうめいで、人の感情に動かされないうような女はいやなものだ。どうかすれば人の誘惑にもかかりそうな人でありながら、さすがに慎つつましくて恋人になつた男に全生命を任せているとい

うような人が私は好きで、おとなしいそうした人を自分の思うように教えて成長させていければよいと思う」

源氏がこう言うのと、

「その好みには遠いように思われませんか、お亡かくれになったことが残念で」

と右近は言いながら泣いていた。空は曇って冷ややかな風が通っていた。

寂しそうに見えた源氏は、

見し人の煙を雲とながむれば夕ゆふべの空もむつまじきかな

と独言ひとりごとのように言っている、返しの歌は言い出されないで、

右近は、こんな時に二人そろっておいになつたらという思い

で胸の詰まる気がした。源氏はうるさかつた砧きぬたの音を思い出し、
てもその夜が恋しくて、「八月九月正長夜まさにながきよ、千声万声無止時せんせいばんせいやむとぎなし」と
歌つていた。

今も伊予介いよのすけの家の小君こぎみは時々源氏の所へ行つたが、以前のよ
うに源氏から手紙を託されて来るようなことがなかつた。自分
の冷淡さに懲りておしまいになつたのかと思つて、空蟬うつせみは心苦
しかつたが、源氏の病氣なげをしていることを聞いた時にはさすが
に歎なげかれた。それに良人おつとの任国へ伴われる日が近づいてくるの
も心細くて、自分を忘れておしまいになつたかと試みる気で、
このごろの御様子を承り、お案じ申し上げてはおりますが、
それを私がどうしてお知らせすることができましよう。

問はぬをもなどかと問はで程ふるにいかばかりかは思ひ乱

るる

苦しがるらん君よりもわれぞ益田ますだのいける甲斐かひなきという歌
が思われます。

こんな手紙を書いた。

思いがけぬあちからの手紙を見て源氏は珍しくもうれしく
も思った。この人を思う熱情も決して醒さめていたのではないの
である。

生きがいがないとはだれが言いたい言葉でしょう。

うつせみの世はうきものと知りにしをまた言の葉にかかる
命よ

はかないことです。

病後の慄えふるの見える手で乱れ書きをした消息は美しかった。蝉せみの脱殻ぬけがらが忘れずに歌われてあるのを、女は気の毒にも思い、うれしくも思えた。こんなふうに手紙などでは好意を見せながらも、これより深い交渉に進もうという意思は空蝉になかった。理解のある優しい女であつたという思い出だけは源氏の心に留めておきたいと願つていたのである。もう一人の女は蔵人少将くらうじと結婚したという噂うわさを源氏は聞いた。それはおかしい、処女でない新妻を少将はどう思うだろうと、その良人おとこに同情もされたいし、またあの空蝉の継娘ままむすめはどんな気持ちでいるのだろうと、それも知りたさに小君はなもんを使いにして手紙を送った。死ぬほど煩悶はんもんしている私の心はわかりますか。

ほのかにも軒ばの荻をぎをむすばずば露のかごとを何にかけま
し

その手紙を枝の長い荻おぎにつけて、そつと見せるようにとは言つたが、源氏の内心では粗相そそうして少将に見つかつた時、妻の以前の情人の自分であることを知つたら、その人の気持ちは慰められるであろうという高ぶつた考えもあつた。しかし小君は少将の来ていないひまをみて手紙の添つた荻の枝を女に見せたのである。恨めしい人ではあるが自分を思い出して情人らしい手紙を送つて来た点では憎くも女は思わなかつた。悪い歌でも早いのが取柄とりえであろうと書いて小君に返事を渡した。

ほのめかす風につけても下荻したをぎの半なかばは霜にむすばほれつつ

下手であるのを洒落れた書き方で紛らしてある字の品の悪いものだった。灯の前にいた夜の顔も連想されるのである。碁盤を中にして慎み深く向かい合つたほうの人の姿態にはどんなに悪い顔だちであるにもせよ、それによつて男の恋の減じるものでないよさがあつた。一方は何の深味もなく、自身の若い容貌に誇つたふうだつたと源氏は思い出して、やはりそれにも心の惹かれるのを覚えた。まだ軒端の萩との情事は清算されたものではなさそうである。

源氏は夕顔の四十九日の法要をそつと叡山の法華堂で行なわせることにした。それはかなり大層なもので、上流の家の法会としてあるべきものは皆用意させたのである。寺へ納める故人の服も新調したし寄進のものも大きかつた。書写の経巻にも、

新しい仏像の装飾にも費用は惜しまれてなかつた。惟光これみつの兄の阿闍梨あじやりは人格者だといわれている僧で、その人が皆引き受けてしたのである。源氏の詩文の師もんじょうはかせをしている親しい某文章博士を呼んで源氏は故人を仏に頼む願文がんもんを書かせた。普通の例と違って故人の名は現わさずに、死んだ愛人を阿弥陀仏あみだぶつにお託しするという意味を、愛のこもつた文章で下書きをして源氏は見せた。「このままで結構でございます。これに筆を入れるところはございません」

博士はこう言った。激情はおさえているがやはり源氏の目からは涙がこぼれ落ちて堪えがたいように見えた。その博士は、「何という人なのだろう、そんな方のお亡なくなりになったことなど話も聞かないほどの人なのに、源氏の君があんなに悲しまれるほど愛されていた人というのはよほど運のいい人だ」

とのちに言つた。作らせた故人の衣裳いししょうを源氏は取り寄せて、袴はかまの腰に、

泣く泣くも今日けふはわが結ゆふ下紐したひもをいづれの世にか解けて見るべき

と書いた。四十九日の間はなおこの世界にさまよつていゝといふ靈魂は、支配者によつて未来のどの道へ赴おもむかせられるのであろうと、こんなことをいろいろと想像しながら般はん若にや心しん経ぎやうの章句を唱えることばかりを源氏はしていた。頭中将に逢あうといつても胸騒むねさわぎがして、あの故人が撫なで子でしこにたとえたという子供の近ごろの様子などを知らせてやりたく思つたが、恋人を死なせた恨みを聞くのがつらくて打ちいでにくかつた。

あの五条の家では女主人の行くえが知れないのを捜す方法もなかつた。右近うこんまでもそれきりたよ便りをして来ないことを不思議に思いながら絶えず心配をしていた。確かなことではないが通つて来る人は源氏の君ではないかといわれていたことから、惟光になんらかの消息を得ようとしたが、まったく知らぬふうで、続いて今も女房の所へ恋の手紙が送られるのであつたから、人々は絶望を感じて、主人を奪われたことを夢のようにばかり思つた。あるいは地方官の息子むすこなどの好色男が、頭中将を恐れて、身の上を隠したままで父の任地へでも伴つて行つてしまつたのではないかとついにはこんな想像をするようになった。この家の持ち主は西の京の乳母めのとの娘だつた。乳母の娘は三人で、右近だけが他人であつたから便りを聞かせる親切がないのだと恨んで、そして皆夫人を恋しがつた。右近のほうでは夫人を頓死とんしさ

せた責任者のように言われるのを、つらくも思っていたし、源氏も今になって故人の情人が自分であった秘密を人に知らせたくないと思うふうであつたから、そんなことで小さいお嬢さんの消息も聞けないままになつて不本意な月日が両方の間にたつていつた。

源氏はせめて夢にでも夕顔を見たいと、長く願っていたが、比叡ひえいで法事をした次の晩、ほのかではあつたが、やはりその人のいた場所は某それがしの院で、源氏が枕まくらもとにすわつた姿を見た女もそこに添つた夢を見た。このことで、荒廃した家などに住む妖怪あやかしが、美しい源氏に恋をしたがために、愛人を取り殺したのであると不思議が解決されたのである。源氏は自身もずいぶん危険だつたことを知つて恐ろしかった。

伊予介いよのすけが十月の初めに四国へ立つことになつた。細君をつれ

て行くことになつていたから、普通の場合よりも多くの餞別品せんべつが源氏から贈られた。またそのほかにも秘密な贈り物があつた。ついでに空蟬うつせみの脱殻ぬけがらと言つた夏の薄衣うすものも返してやつた。

逢あふまでの形見ばかりと見しほどにひたすら袖そでの朽ちにけるかな

細こま々しい手紙の内容は省略する。贈り物の使いは帰つてしまつたが、そのあとで空蟬は小君こぎみを使いにして小桂こうちぎの返歌だけをした。

蝉の羽もたち変へてける夏ごろもかへすを見ても音ねは泣かれけり

源氏は空蟬を思うと、普通の女性のとりえない態度をとり続けた女ともこれで別れてしまうのだと歎なげかれて、運命の冷たさというようなものが感ぜられた。

今日きょうから冬の季にはいる日は、いかにもそれらしく、時雨しぐれがこぼれたりして、空の色も身に沁しんだ。終日源氏は物思いをしていて、

過ぎにしも今日別るるも二みちに行く方かた知らぬ秋の暮くれかななどと思つていた。秘密な恋をする者の苦しさが源氏にわかつたであろうと思われる。

こうした空蟬とか夕顔とかいうようなはなやかでない女と源

氏のした恋の話は、源氏自身が非常に隠していたことがあるからと思つて、最初は書かなかつたのであるが、帝王の子だからといつて、その恋人までが皆完全に近い女性で、いいことばかりが書かれているではないかといつて、仮作したもののように言う人があつたから、これらを補つて書いた。なんだか源氏に済まない気がする。

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店
1971（昭和 46）年 8 月 10 日改版初版発行
1994（平成 6）年 12 月 20 日 56 版発行

※このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で
入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成 14）年 4 月 5 日 71 版を使用しました。

入力：上田英代

校正：小林繁雄、鈴木厚司

2003 年 4 月 20 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。